

## 財団からのお知らせ

### 財団主導型研究事業について II

当財団では平成 20 年度から財団主導型事業を始めました。この事業は精神・神経・筋・発達障害および精神保健の領域で社会的に重要な課題を選び、財団が中心になって多施設行動研究を進めたり、啓発活動の一環としての集会を開催するというものです。

このような事業を行うことが財団に与えられた重要な任務の一つであると考えられます。その際に、公益法人として、公平性、透明性を保つことが重要です。すなわち、特定の個人や企業に偏ることなく、広く開かれた形で運営することです。例えば、製薬企業に寄付をお願いする場合でも、特定の企業ではなく、製薬協などを通じて、全企業をお願いするわけです、また、結果も公表し、それを誰もが活用しようという形をとっています。

平成 21 年度及び 22 年度に行った事業は以下の通りです。

#### 1. MCCB (MATRICS Consensus Cognitive Battery) の日本語標準化研究

統合失調症患者の社会復帰には国としても大きな関心を持ち、現在、地域移行・地域定着を精力的に進めているところです。しかしながら、現実的には統合失調者の地域生活には多くの障害が立ちふさがっております。その要因の一つとして、統合失調症患者の持つ様々な機能障害があります。とりわけ、近年注目されているのが認知機能の障害です。この機能障害のために、適切なコミュニケーション、円滑な対人関係に支障をきたしています。したがって、この認知機能の障害を適切に評価し、その治療法を開発することは、統合失調症患者の地域移行、地域生活支援を進めるにあたって極めて重要な課題です。

本研究はその目的のために統合失調症の認知機能障害評価法—MATRICS ((Measurement and treatment research to improve cognition in schizophrenia) の標準化を目指します。MATRICS はすでに欧米諸国では広く使用され、その有効性も明らかにされております。MATRICS 日本語版の標準化を行い、わが国でも適正に使用することが可能であることが示されれば、今後日本における薬物療法を初めとする多様な治療法の開

発及び評価に役立つものと期待されます。

本研究には 15 の大学その他の研究施設が参加して、健常者 500 名を対象として研究を進めており、平成 22 年度中に完成予定です。

#### 2. CogState 認知機能評価法標準化研究

本研究も MATRICS 研究と同じ目的で行う認知機能評価法の標準化研究です。6 施設の多施設共同研究であり、健常者、統合失調症患者各 50 名を対象として、測定が完了しました。目下データの解析中で平成 22 年度中に論文として公表予定です。

#### 3. 実践的精神科薬物治療研究プロジェクト： 大うつ病薬物療法の最適化の研究

わが国では、もっとも適切な薬物治療を行うための指針が十分ではありません。それをつくるための「実践的エビデンス」を得る目的で本プロジェクトを計画しました。本研究では、各種向精神病薬の市販後調査を行い、その成績に基づいて、的確な治療指針を定めるといったものです。エビデンスに基づいた質の高い薬物療法の確立のために必要な研究だと思われます。本年度は京都大学大学院医学研究科の古川壽亮教授を中心に予備的研究を行い、本格的な研究は平成 23 年度開始を目指しています。

#### 4. リカバリー全国フォーラム 2010

平成 22 年 9 月 10 日、11 日の 2 日間にわたり、文京区本郷の文京学院大学で開催しました。地域精神保健福祉連絡機構（コンボ）との共催でした。当事者、家族、医療関係者、支援者、一般市民など約 1200 名が参加し、活発な情報と意見の交換が行われ、アンケートには 80% 以上の方々が「大いに満足」「満足」と答えられていました。障害を持っていないながら、前向きの人生を歩むというリカバリーの概念が広まり、それが共有されることによって、当事者や家族が力を得たように思われました。また、両日で 22 の分科会を行い、「アンチスティグマとリカバリー」を当財団が担当しました。ここでは、リカバリーが進み当事者が元気になる社会参加が増えると、スティグマが減少し、スティグマが小さくなるとリカバリーも進めやすくなることから、「アンチスティグマとリカバリーは車の両輪である」という、標語が示されました。

今回成功裡に終えることができ、参加者から来年の開催希望が強いので、今後、毎年開催する予定です。